

流山市このす台第 I 遺跡採集遺物について

渡 辺 修 一

I はじめに

筆者が1990年夏に都市計画街路新川・南流山線建設に伴う調査に従事した際、流山市在住の調査補助員である小山みつ江さんから、畑の耕作中に採集した遺物の寄託を受けた。遺物は黒曜石製の剥片を主体とする石器200点余りであったが、石鏃や石鏃未製品を含み、また同一母岩と思われる遺物がまとまっており、明らかに縄文時代の石器製作にかかわる遺物群であることが知れた。採集時の状況を小山さんに尋ねたところ、やはりまとまりを以て存在し、また土器片も一緒に採集されたとのことであったが、土器片については捨てたとのことであった。伴出土器が不明となった点は非常に惜しまれるが、お話しによると「キラキラした土器」であったということで、おそらく縄文時

代中期初頭から中葉までのいずれかの段階の土器であったと思われる。採集場所は流山市このす台1593、このす台第 I 遺跡として知られているところで、遺跡分布地図によると阿玉台期の遺跡となっている（註1）。

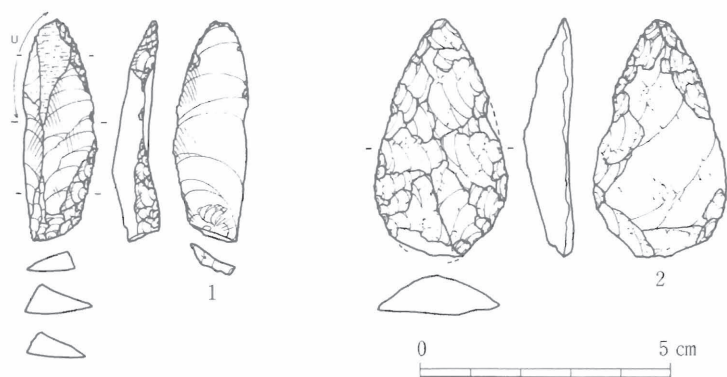
II 出土遺物

概要 寄託を受けた遺物は、石器204点、古銭3点である。うち2点の石器はその特徴から明らかに先土器時代の石器と思われるものであり、石鏃あるいは石鏃や黒曜石製の剥片を主体とする他の石器は縄文時代の所産であると判断された。

先土器時代の石器（第2図・第1表） 1は尖頭部を持つナイフ形石器である。黒曜石の縦長剥片を素材とする。打面を残している。打面は平坦



第1図 遺跡の位置 (1/50,000 野田)



第2図 こうのす台第I遺跡採集石器(2)(2/3)

第1表 こうのす台第I遺跡採集石器計測値(1)

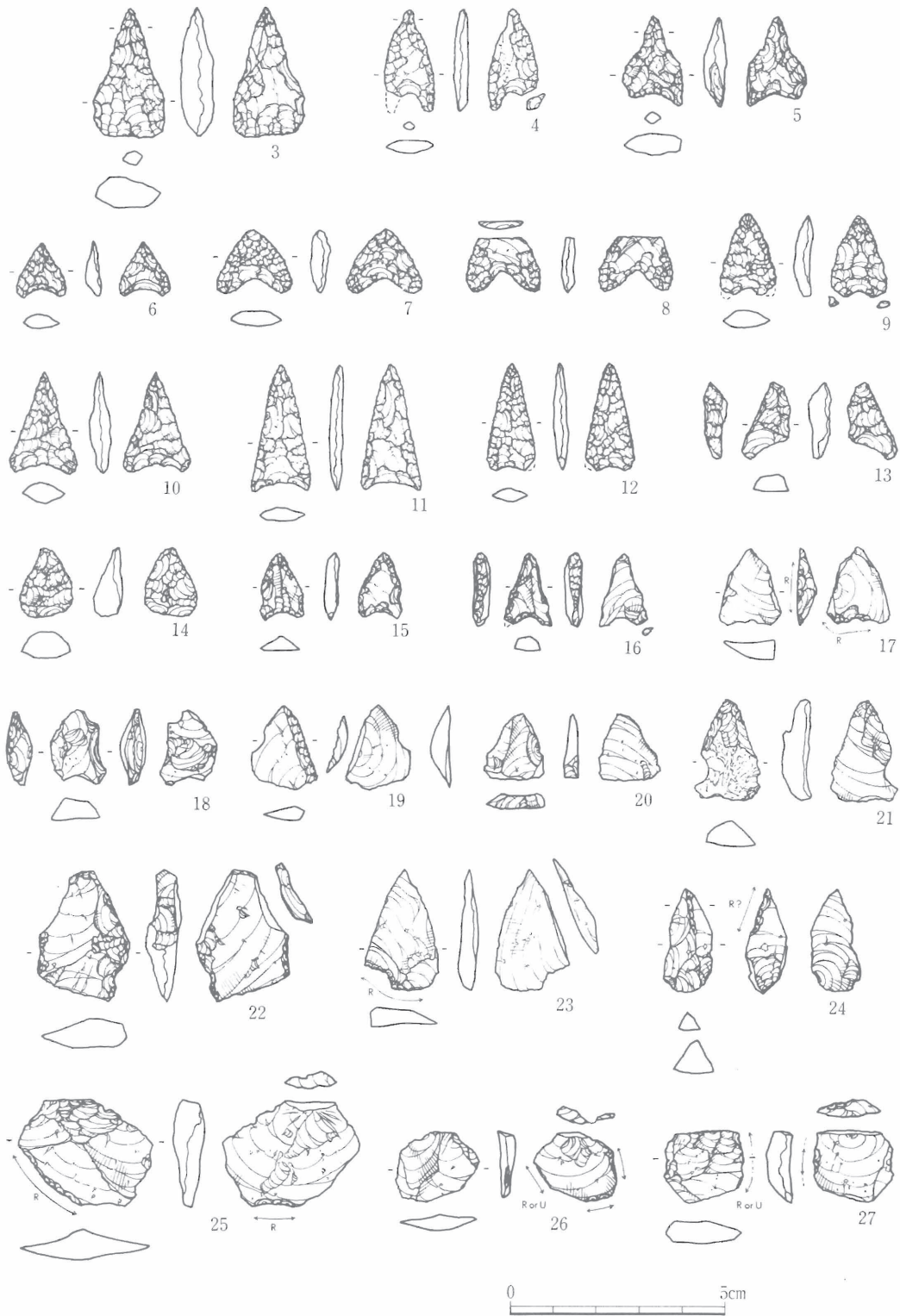
遺物番号	挿図番号	器種	石質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角	調整角	使用痕の有無	折れ面の有無
a-1	1	ナイフ形石器	黒曜石	42.8	14.6	6.3	3.7	108	62~66	+	
β 1	2	石槍	安山岩	47.4	26.0	7.6	9.8	-	-		

であるが、頭部調整が行われている。ブランティングは右側縁にのみ見られるが、基部の調整と尖頭部の作出を企図して行われ、右側縁中位にはブランティングが及ばない。なお左側縁尖頭部側に使用痕かと思われる微細な剝離痕が観察される。2は安山岩製の半両面加工の石槍である。最大幅が著しく下位にあり、「横倉型尖頭器」と呼ばれる一群と共通した形状を示すと言える。主要剝離面を大きく残すが、その基部側はごく粗い剝離を加えるに留まり、細かい調整は背面側から行われている。しかし腹面の尖頭部側にはバルブを残した剝離痕が連続し、最終的に腹面側からの調整によって尖頭部が作出されている。先土器時代最終末～縄文時代草創期の石器であろう。

縄文時代の石器 (第3図～第6図・第2表～第4表) 石鏃、石錐の説明には、仮に実測図左側をA面、右側をB面としておく。3～5を石錐とする。3は全体に分厚く、錐部はA B両面とも右側縁に最終調整が集中する。基部は直線的に整えられている。4は凹基をなすもので、石鏃の再調整品である可能性を想定する。5は基部の調整がA面から、錐部の調整がB面から加えられているものであるが、A面右側縁基部側は折断面を残してその上に多少の調整を加えているだけである。

6～12は完成された石鏃である。長幅比などによって、6～8、9～10、11～12の三種に分類することは可能である。基部の凹みが緩やかで、長幅比の大きい11、12は他とは異なって黒曜石を使

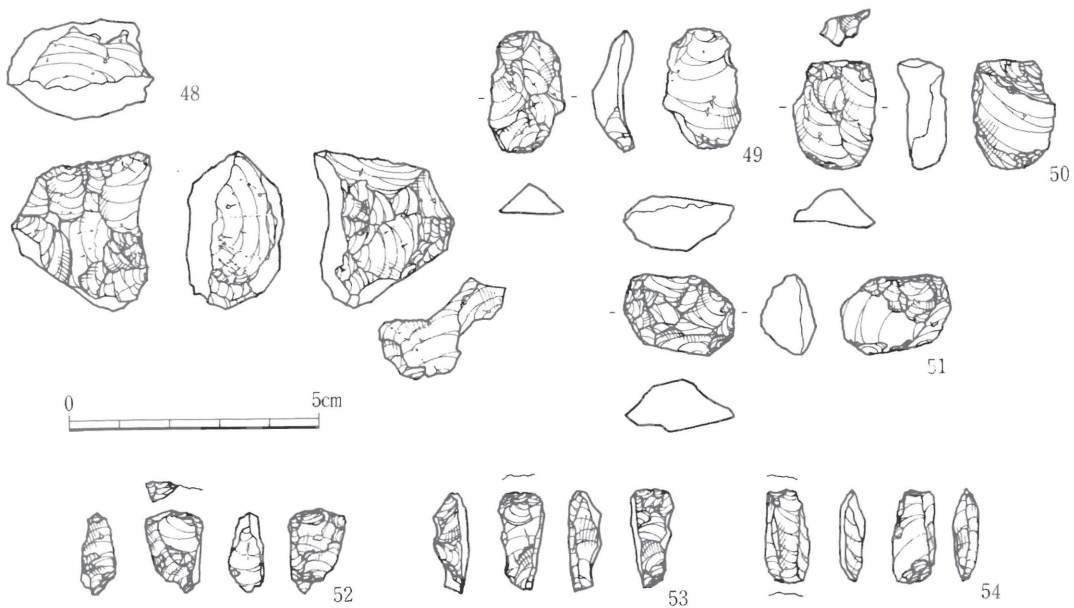
用せず、したがって少なくとも遺跡内で生産されたものではあるまい。13～16については石鏃未製品あるいはその可能性のあるものとして捉えた。13はA面左側縁の調整が非常に急斜で、また尖頭部の形状も鈍い。加工の最終段階の直前に成形に失敗し、放棄されたものである可能性がある。14も尖頭部が鈍く、基部側が分厚い。バルブの残る剝離面はA面に集中するが、とくにA面基部側の高まりはさらに除去する必要があると思われる。しかしここまで小さなものになるとその作業は困難を極め、したがってこれも加工途中で放棄された可能性がある。15、16はむしろ前二者よりも石鏃としての機能を果たし得るものであろう。とりわけ15は未製品と見る必要はないかもしれない。A面、B面(主要剝離面)双方に周縁から細かい剝離を連続的に施すものである。16は、ほぼA面の周縁にのみ加工を施すものであるが、その剝離はブランティングのように急斜なものである。それ故に、形状こそ整った尖頭状をなしているが、尖頭部、側縁部ともに非常に鈍い。17～23は石鏃未製品で、その早い段階のものまたは二次加工が狭い範囲に留まるものを集めてある。17は小型の剝片をほぼそのまま利用したものである。主要剝離面の左側縁に連続した剝離を加えて基部とし、また打面部にも細かい二次的剝離痕が観察され、本来の打面はごく一部しか残っていない。18は両極剝離によって生産された剝片を素材にしている可能性があるもので、A面の両側縁に急斜な剝離



第3図 こうのす台第I遺跡採集石器(2)(2/3)



第4図 こうのす台第I遺跡採集石器(3)(2/3)



第5図 こうのす台第I遺跡採集石器(4)(2/3)

を加え、形状を整えつつある段階に留まる。19は17に類似した形状の剥片をそのままに、打面側の厚みを減じ、側縁のエッジを作出するためにA面に連続的な剥離を加えている。しかし打瘤の除去は行われておらず、このままで石鏃として機能し得る形状を持つものの、未製品と考える。20は折断された剥片の尾部を尖頭部として用いるものであり、基部となった折断面とA面右側縁に僅かに二次加工が施されている。21は礫皮面を残す剥片の頭部側に集中的に加工を施して尖頭部を形成している。しかしA面尖頭部が階段状剥離であるなどまだ粗い成形に留まる。22は当遺跡では大ぶりの剥片の二方を折断して粗く尖頭部を作り、周縁に細かい剥離を加えて形状を整えはじめた段階のものである。23も折断によって尖頭部を作出し、基部となるところに細かい連続的な剥離を施す。これは折断面には手を加えていないが、鋭い尖頭部を有しており、刺突機能は既に充分であろう。

24は両極打撃により剥離された剥片であるが、末端が尖頭状をなし、断面が正三角形を呈するものである。おそらく刺突具として用いられれば有効なものであったろうが、実際にそれを意図したらしく、背稜に細かい剥離痕が連続している。おそらく二次的なものであろう。25~27の3点は、貝殻状の剥片の一部に二次剥離痕を持つものである。25の場合、背面の剥離痕と腹面の剥離痕が連

続している。26は腹面側の3ヶ所に短く連続した剥離痕が観察される。27は一側縁に背腹両面からの剥離痕が見られ、結果として連続している。同様の剥離痕が観察される石器は他にも36と37aの2点がある。36は2面の折断により短冊状とした剥片の末端に細かい連続剥離が認められる。37aは分厚い矩形の剥片の腹面右側縁に同様の剥離が連続している。これらの細かい連続剥離が当初から意図的に加えられたものであるかどうかの判断は微妙なものがあるが、いずれも削器としての機能を想定してもよいのではなかろうか。28は石核底面を残す剥片である。その底面には腹面側からの剥離が観察されるが、それは使用痕と見るべきものであろう。この石器も削器としての機能を考定してよいだろう。

29~34は剥片の縁辺の一部に使用痕と思われる微細剥離が認められるものである。うち29については、微細な剥離痕ではあるものの、その剥離角は25~27、36、37aなどと大差なく、それらのグループに入れて考えるのが妥当かもしれない。他は剥離角の小さいものである。30、31は背面左側縁のほぼ全体に使用痕が及ぶものであるが、両者とも対縁が主要剥離面とほぼ90°の角度をなす面を持ち、刃器として適した形状と言える。32~34はいずれも貝殻状の小型剥片で、その一端に微細剥離痕を有するものである。35は2面の折断面を持

つ剥片であるが、折断面上に微細剝離痕が認められる。何らかの使用痕の可能性があり、また一部は意図的な剝離の可能性もある。

38～44に剥片を例示する。当遺物群の中では、剥片といわゆる碎片の区別が困難で、しかも何らかの機械的な区別の基準を設けたとしても果たして意味があるかどうかという問題があり、石核と特定の器種以外はすべて剥片として扱っている。ここに例示した剥片群は、それらの中でも大ぶりな方であるが、38～42などが一般的な剥片と言える。このような形状の剥片が多数生産されているのであり、41、42のように両極打法を用いているものがある。43はごく一般的な小型の剥片であるが、この剥片が剝離された後の、両極打撃によると思われる剝離痕が背面右側縁から加えられている。その意味では両極石核となるが、ここでは剥片としておく。44は大型の剥片で、折断により尾部を残すものである。とくに使用痕等は認められない。

45～48は石核である。しかし45～47については石器素材としての有効な剥片が剝離された痕はなく、とくに45、46については明らかな両極打撃である。47については下端が折れているが、バルブを持つ剝離痕も、この石核自身を石器の素材とすべく意図された可能性を持つであろう。

最後に49～54に示したのが、楔形石器とされがちな両極剥片及び両極石核である。49は両極剥片で、上下両端に両極打撃による細かい剝離痕が見られる。50、51は両極石核で、51にはほぼ直交した2つの加撃方向がある。52～54もまた両極石核で、非常に小型のものである。同種の例は他にも数点ある。これらの石器をどう評価するかは焦点の一つであろう。

さて上記の遺物群は、単体資料を含めA～Mの18母岩に分類された。しかしこの母岩別分類については、識別の困難な黒曜石であったため、一部正確なものとは言えない。また採集資料である故にあまりここから導き出されるデータはないであろう。遺物番号を決する便宜もあって分類を実施したものである。接合資料も乏しく、母岩Dにおいて僅か1資料があるのみである。37aについては既に述べたが、この接合資料は剥片の頭部と尾部の折れ面での接合例である。ただこれは、剥片が剝離された時点で、同時に碎けた可能性が濃厚



第6図 接合資料 (2/3)

である。おそらく他にも同時に碎けた破片があると思われる。

古銭 上記報告した石器群とともに3点の古銭も寄託された。いずれも新寛永銅一文銭であったが、ここで採集資料であるそれらを報告してもあまり意味がないと思われるので省略する。

III 当遺跡石器群の特徴

ここに報告した石器群は、採集された地点が石器製作跡であるか否かは別として、縄文時代の剥片石器製作にかかわる遺物群であることは明らかである。定型的な石器としては石鏃の製作を主眼としたものであるのは疑いないが、素材として生産される剥片群の中から、削器、刃器も得ているものと考えられた。採集された遺物群には、石鏃調整剥片（いわゆる石鏃チップ）はほとんど含まれないが、これは微細なものについては採集されなかったというだけであろう。石鏃の製作工程を子細に追及するには未製品の数が些か乏しい。しかしここで注目すべき技法はやはり折断である。17、18のような偶発的な形状の剥片を利用したものはともかく、20、22、23の3点の石鏃未製品が折断によって形状を整えてから調整を加える。

縄文時代の剥片石器生産における折断技法の重要性はすでに田中英司が指摘している(註2)。当遺跡採集資料では、黒曜石の剥片及び石鏃未製品中で42点に折れ面が確認された。そのすべてが意図的なものとは言いがたいとしても、折断が多用されていることは確かであろう。また他に重視すべきなのは両極打法である。両極打法は縄文時代を通じて存在し続ける。勿論ピエス・エスキューの生産にその存在理由を求めることができるとも言えようが、現実にはピエス・エスキューとは言えない両極石核、両極剥片の存在も非常に大きなものがある。また原材の粗割りはもとより、さらに剥片を得る際にも両極打撃が用いられる場合がある。ただ当遺跡では49～54に例示したようなもの

第2表 こうのす台第1選鉱採集石器計測値(2)

遺物番号	挿図番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角	調整角	使用痕の有無	折れ面の有無
母岩 A 透明度の高い單礫石、縞状の流理が見える。										
A 1	44	剥片	31.8	45.7	8.7	14.9				+
2		剥片	26.6	30.4	11.0	7.9				+
3		剥片	18.1	18.4	9.9	2.7				+
4		剥片	13.2	7.8	2.9	0.3	118			
5	29	剥片	23.3	17.3	5.6	2.2	102			
6		剥片	23.1	20.2	5.5	2.2	118			
7	28	剥片	20.4	24.2	9.0	3.5	122	78~84		+
8	42	剥片	17.6	20.6	5.1	1.4	106			
9	22	石織未製品	30.2	22.4	7.9	4.2		+		
10	25	剥片	24.6	31.5	16.7	4.4	122	54~82		
11		剥片	26.9	17.9	3.0	1.5	104			
12	38	剥片	27.3	26.7	18.2	5.0	118			
13	34	剥片	21.1	27.4	3.2	1.8	98			+
14	41	剥片	20.0	24.9	3.9	1.8				+
15		剥片	20.0	12.7	4.3	1.1	96			
16	23	石織未製品	26.8	16.8	3.2	1.3		56~84		+
17	43	剥片	14.4	19.6	5.1	1.5	98			
18	24	剥片	24.4	10.8	9.2	2.0				
19	47	石核	17.3	23.5	6.0	2.2	58			
20	46	石核	19.3	22.1	9.6	3.5	84			
21		剥片	11.5	18.1	5.2	1.4	104			
22	32	剥片	23.4	22.9	4.4	1.8				
23		石核	12.4	19.9	6.7	2.0				
24		剥片	19.3	21.2	6.1	1.8				
25		剥片	11.3	20.1	6.2	1.5				
26	36	剥片	29.2	14.1	4.4	1.6	114	72~78		+
27		剥片	14.7	20.7	2.0	0.4	104			
28		剥片	17.6	12.8	6.9	1.1				
29		剥片	18.9	20.0	2.5	0.9				+
30	45	石核	26.7	17.7	10.0	3.7				
31	49	両極剥片	23.7	14.9	5.8	2.2				
32		剥片	13.3	16.9	3.0	0.6				
33	21	石織未製品	22.6	14.9	6.0	1.9		64		+
34		剥片	15.5	17.6	6.0	1.7				
35		剥片	15.7	16.5	2.7	0.8				
36		両極石核	19.9	9.7	5.8	1.2				
37		剥片	18.9	17.0	15.4	1.4				
38		剥片	8.1	21.4	3.8	0.8				
A 39		遺物番号								
40	26	剥片	22.4	18.5	5.2	1.8				
41		剥片	14.4	20.0	3.3	1.0	118			+
42		剥片	16.5	13.9	2.3	0.6				
43	52	剥片	20.9	13.8	2.2	0.6	82			
44		両極石核	15.8	11.6	6.9	1.2				
45		剥片	15.4	10.8	3.1	0.5				
46		剥片	16.0	15.0	3.4	0.8	125			
47	17	石織未製品	17.6	16.0	3.5	0.7				
48		両極石核	17.8	12.2	5.2	1.0		48~62		
49	53	両極石核	16.9	7.8	4.7	0.7				
50	58	両極石核	19.2	8.8	5.8	1.2				+
51		剥片	12.8	8.8	3.0	0.3				+
52		剥片	11.6	16.8	2.9	1.0				+
53		剥片	17.0	17.6	5.6	1.1				
54		剥片	12.2	16.3	3.8	1.0				
55		剥片	16.4	15.3	2.5	0.6	104			
56		剥片	17.6	12.7	2.0	0.5	110			
57		剥片	12.5	16.9	3.4	0.5	70			
58		剥片	14.7	15.5	3.0	0.7	108			
59	19	石織未製品	19.6	14.3	3.2	0.7	114	96		
60		剥片	9.3	14.2	1.5	0.2				
61		剥片	16.5	12.6	3.8	0.4				
62		剥片	16.1	10.1	3.0	0.4				
63		剥片	14.5	12.9	4.1	0.8				
64		石核	13.3	19.1	6.5	1.3				
65	18	両極石核	18.1	12.0	6.4	1.1				
66		石織未製品	16.6	13.8	5.6	1.2				
67		剥片	11.6	10.4	3.6	0.4	116			
68		剥片	13.2	9.4	2.7	0.1				
69		剥片	12.4	12.8	1.8	0.3				
70		剥片	10.1	16.6	2.2	0.3				
71	15	石織未製品	15.0	10.3	3.1	0.4				
72		剥片	16.5	9.4	4.4	0.7				
73		両極石核	10.6	9.7	3.3	0.5				
74		剥片	12.4	16.2	2.3	0.5				
75		剥片	15.7	11.9	2.9	0.3				
76		剥片	12.6	11.3	3.7	0.6				
77		剥片	13.8	15.7	2.7	0.6				
78		剥片	15.9	7.8	3.5	0.3				+

第3表 こうのす台第1遺跡採集石器計測値(3)

遺物番号	種別	最大長	最大幅	重量	打角	調整角	使用痕の有無	折れ面の有無
番号	器	mm	mm	g	打角	調整角	の有無	の有無
A 79	剥片	12.0	10.1	3.7	0.3			
80	両極石核	17.2	5.8	4.9	0.5			
81	剥片	11.0	12.6	1.8	0.1	114		
82	剥片	10.0	12.6	2.8	0.3			
83	剥片	8.4	10.0	2.7	0.1			+
84	剥片	14.3	9.9	1.4	0.2			
85	剥片	16.6	11.2	2.0	0.2			
86	剥片	6.0	9.2	2.3	0.1			
87	剥片	11.8	9.7	1.7	0.2			
88	剥片	7.4	15.3	3.3	0.1			
89	剥片	8.3	11.2	1.3	0.1			
90	剥片	9.6	10.7	1.7	0.1			+
91	剥片	8.9	8.5	1.9	0.1			
92	剥片	9.8	9.8	1.1	0.1			
93	剥片	9.4	7.1	1.9	0.1			
94	剥片	13.4	5.2	3.1	0.1			
95	剥片	8.1	8.4	2.8	0.1			+
母岩B やや灰色がかった透明度の低い黒曜石、比較的良質。								
B 1	両極石核	21.5	16.3	8.6	2.5			
2	31 剥片	40.8	17.6	7.2	4.1	96	+	
3	剥片	13.3	23.0	3.7	1.4			
4	51 両極石核	22.5	15.7	10.0	3.5			
5	剥片	27.5	12.5	3.5	1.2			+
6	剥片	16.3	24.2	3.5	1.5			+
7	剥片	17.0	20.3	8.0	1.8			+
8	石核	19.1	11.3	14.4	1.8			
9	剥片	14.4	15.4	4.1	0.9			
10	剥片	16.1	11.1	3.0	0.5			
11	剥片	13.5	12.6	7.1	1.7			+
12	剥片	15.3	14.9	5.1	0.8			
13	剥片	15.0	18.2	4.2	1.2			+
14	剥片	19.7	10.9	4.5	0.7			
15	剥片	15.0	11.0	2.8	0.4			
16	剥片	11.6	16.7	5.9	1.0			
17	剥片	14.6	19.2	3.0	0.8			
18	両極石核	12.2	21.2	5.5	1.3			
19	剥片	19.5	7.0	9.0	1.1			+
20	剥片	13.2	3.8	2.9	0.5			+
21	剥片	21.7	15.9	4.3	0.5			+

遺物番号	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	打角	調整角	使用痕の有無	折れ面の有無
番号	器	mm	mm	mm	g	打角	調整角	の有無	の有無
B 22	剥片	16.2	21.3	5.0	1.2				+
23	剥片	11.5	22.4	9.2	2.3				
24	剥片	11.7	19.4	2.2	0.3				
25	54 両極石核	19.0	8.4	4.1	1.0				
26	両極剥片	14.2	15.2	6.6	1.2				
27	剥片	14.0	17.0	4.0	1.1				
28	剥片	11.5	13.0	2.5	0.4				
29	剥片	7.0	11.2	2.3	0.1				+
30	剥片	11.6	14.6	4.0	0.4				
31	剥片	15.0	13.0	4.2	0.6				
32	剥片	15.7	9.3	3.3	0.5				
33	剥片	13.9	9.6	4.5	0.7				
34	剥片	12.2	14.4	1.8	0.3				
35	剥片	19.2	11.5	3.0	0.5				
36	石核	12.5	18.4	4.5	1.0				
37	剥片	7.9	11.9	4.8	0.5				
38	14 石織(未?)	15.8	12.0	6.7	1.1				+
39	剥片	10.7	13.3	1.9	0.4				
40	剥片	12.4	9.1	2.3	0.3				
41	剥片	15.1	8.5	2.5	0.3				
42	剥片	13.6	7.9	3.5	0.5				
43	剥片	9.9	10.2	3.1	0.3				
44	両極剥片	8.9	10.4	3.3	0.2				
45	剥片	9.5	9.5	5.4	0.3				
46	剥片	16.6	13.3	2.8	0.6				
47	剥片	18.3	11.9	5.7	0.8				
48	剥片	12.7	9.0	3.0	0.3				
49	剥片	10.9	11.2	6.2	0.6				
50	剥片	15.0	10.6	4.3	0.4				
51	剥片	8.9	13.0	3.9	0.2				
52	剥片	7.8	8.9	4.3	0.3				
53	剥片	8.3	11.4	4.3	0.6				
54	剥片	10.9	7.8	3.5	0.1				
55	剥片	8.6	7.2	1.6	0.1				
56	20 石織未製品	14.2	13.4	3.0	0.6				+
57	13 石織(未?)	17.6	9.0	5.0	0.6				
母岩C やや透明度の高い黒曜石、良質で斑霧状の構造が見える。									
C 1	剥片	21.8	20.2	3.4	1.0	98			+
2	剥片	15.4	19.4	3.2	0.8	102			+
3	剥片	20.6	13.4	3.5	0.7				+

第4表 こうのす台第I遺跡採集石器計測値(4)

遺物番号	種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角	調整角	使用痕の有無	折れ面の有無
C 4	石 鏃	14.0	17.5	3.8	0.8				
5	石 片	12.2	17.3	2.5	0.7				
6	石 片	11.8	17.4	3.0	0.5				
7	石 片	15.0	11.9	3.0	0.2				
8	石 燧石製品	16.2	11.0	3.8	0.6				+
9	石 片	12.0	16.4	3.5	0.4				
10	石 片	12.0	10.0	2.2	0.2				
11	石 片	12.0	10.0	2.8	0.2				+
12	石 片	12.2	6.5	3.5	0.2				
13	石 片	7.0	13.5	1.8	0.2				+
14	石 片	11.0	9.8	1.8	0.1				
15	石 片	6.5	11.5	1.0	0.1				+
16	石 片	12.0	7.5	2.5	0.1				
母岩D 透明度の低い黒曜石、部分的に細かい球顆を多く含む、複雑な割れ方を呈する。									
D 1	37a 石 片	18.0	22.2	13.0	6.1	118	+		+
2	37b 石 片	15.0	20.2	10.3	2.4				+
3	石 片	19.4	26.4	3.3	1.5				+
4	石 片	20.2	14.8	5.8	1.7				
5	27 石 片	16.4	19.9	5.6	2.0	102	+		
6	5 石 片	20.7	14.0	4.9	1.2				
7	10 石 片	23.5	15.6	4.7	1.1				
8	9 石 片	18.2	12.2	3.9	1.0				
9	石 片	14.0	9.2	5.1	0.5				
母岩E やや灰色がかった透明度の低い黒曜石、縞状の流理が明瞭。									
E 1	石 片	26.3	17.3	10.2	3.7				+
2	48 石 核	25.5	31.1	18.3	14.5	112			
3	30 石 片	27.8	17.6	7.7	4.0				+
4	石 片	26.7	23.6	7.2	2.9				
5	石 片	21.5	18.7	8.5	2.5				
6	39 石 片	20.6	23.5	6.3	3.1	106			+
7	35 石 片	23.2	16.4	7.3	2.9				
8	33 石 片	17.0	22.2	7.5	2.3	102			+
9	石 片	13.1	16.7	9.2	2.2				+
10	両極石核	17.7	12.2	5.8	1.5				
11	石 片	13.5	14.0	5.3	0.8				
12	石 片	9.8	11.8	3.7	0.4				
母岩F 灰色がかった黒曜石、縞状の流理が見える。ガラス光沢が弱い。									
F 1	40 石 片	24.0	25.3	2.9	1.3				+
2	石 片	9.0	7.9	6.0	1.4				



佐倉市生谷新畑遺跡採集の石器 (2/3)



第7図 佐倉市向原遺跡出土石器(上段)、四街道市池花南遺跡出土石器(下段) (1/2)

をどう捉えるかが重要であるが、ここではそれらを特定の石器の素材としているような状況は認められない。

縄文時代の剥片石器生産にかかわる資料の報告例は意外なほど少ない。千葉県でもその例に漏れず、とくに見るべき資料の提示は佐倉市向原遺跡（第7図上段）の報文（註3）以外ほとんどないと言って過言ではあるまい。向原遺跡の場合、帰属時期の判定が困難な資料ではあるが、A～Cの3ヶ所の石器集中地点が検出され、約7,500点に及ぶ遺物が出土している。各集中区が石器を製作した場かどうかの検討はなされていないが、遺物群の内容を見ると、典型的な石器として石鏃が生産されているのは明らかである。そこには際立った特徴がある。石材は黒曜石が大半を占め、少量のチャート等が伴うが、石鏃未製品中とくに第7図4～9の前段階のものとして11～17に見るような両極石核が存在しているのである。つまりここでは両極石核が石鏃の素材として供給されているのである。その傾向はチャート製のものにより顕著であるとのことであった。おそらくチャートの小礫を原材とするために多用された技法であろうが、黒曜石の分割礫にも応用されている。

しかしながら向原遺跡のような内容の、良好な報告例は現在のところ見られない。石鏃を主体とした剥片石器生産にかかわる資料として、神奈川県中村遺跡（註4）、埼玉県久保山遺跡（註5）、東京都多摩ニュータウンNo.852遺跡（註6）などの好例を挙げることができる。石材はほとんど黒曜石が用いられるが、向原遺跡のような両極石核を石鏃の素材とすることはない。両極打法は存在はしても原材の分割から一部剥片を得るまでで、その点本稿で報告したこのす台第I遺跡も基本的に同様であると言えるであろう。比較的粗雑な剥片剥離から、石鏃の加工に適した剥片を選択的に用い、折断によって大まかな成形を行うのが一般的な在り方であったと考えられる。向原遺跡の場合は、原材の用い方に規定された技法と言うべきであろう。第7図の下段に示した四街道市池花南遺跡（縄文時代後期後葉）の資料（註7）は、石鏃、石鏃未製品ともに含まないものである。石鏃を生産していないと断定はできないが、そこで用いられた黒曜石は非常に粗悪なもので、石鏃のような微細な調整が可能であったかどうか疑わし

い。しかしこの池花南遺跡にも剥片生産の在り方の一端を見ることはできる。ここでも両極打撃の存在は明白ではあるが、楔形石器とも言うような両極石核は27のみであり、それとて石鏃の素材とするには非常な無理がある。むしろここでも24～26に示した折断剥片に注意を払うべきであろう。24や25などはそれだけで鋭利な尖頭部を得ており、相当の威力を持ったはずである。定型的な石器を生産したとは思われないかかる資料の存在にも留意が必要であろう。

IV おわりに

以上このす台第I遺跡採集資料の報告を行った。これまで千葉県内の縄文時代の遺跡で石器生産にかかわる資料が得られても、石鏃や石鏃未製品など以外は実測図の提示もなく考察の対象にもならないことが多く、本稿は採集資料ながら貴重な資料を追加しえたと自負している。今日まで軽視されがちであった縄文時代の石器生産に関する研究に少しでも寄与できれば幸いと思う。なお今回報告した資料の実測には、当センター調査補助員である小園子文恵氏の多大な助力を得ている。氏の助力がなければ本稿はなしえなかった。文末ではあるが、ここに深謝の意を表しておきたい。

- 註1 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』
(財)千葉県文化財センター 1985
- 2 田中英司「折断と縄文時代の剥片石器製作」
『石器研究』2 1981
- 3 大原正義『佐倉市向原遺跡』
(財)千葉県文化財センター 1989
向原遺跡の資料については整理作業を担当した宮城孝之氏から多大な教示を得た。
- 4 小池聡・他『中村遺跡』
中村遺跡発掘調査団 1987
- 5 山下秀樹・他『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告I 久保山』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 6 阿部祥人・他「No.852遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和85年度 第6分冊』
(財)東京都埋蔵文化財センター 1984
- 7 渡辺修一『四街道市内黒田遺跡群』
(財)千葉県文化財センター 1991